

釧路市動物園基本計画

「いのちとふれあい、いのちをつむぐ」

—何度でも来たくなる動物園—

平成23年3月

釧路市動物園

目次

はじめに

1. 基本計画の位置づけ・・・・・・・・・・・・・・・・	1
1. 1. 基本計画の目的と位置づけ	
1. 2. 基本計画の検討の流れ	
2. 釧路市動物園の現況・・・・・・・・・・・・・・・・	3
2. 1. 釧路市動物園の概要	
2. 2. 釧路市動物園の広域状況	
2. 3. 釧路市動物園内の現況	
2. 4. 釧路市動物園の特性と課題	
3. 世の中の動向・・・・・・・・・・・・・・・・	12
3. 1. 世の中の動向	
3. 2. 動物園の動向	
4. 釧路市動物園の価値・・・・・・・・・・・・・・・・	14
5. 基本方針・・・・・・・・・・・・・・・・	15
5. 1. 基本理念	
5. 2. 目標と方針	
6. 施設整備計画・・・・・・・・・・・・・・・・	21
6. 1. ゾーニング計画	
6. 2. 施設整備方針	
7. 活性化に向けたソフト事業と経営戦略・・・・・・・・	34
7. 1. 活性化に向けたソフト事業	
7. 2. 活性化に向けた経営戦略	
8. ブランディング戦略・・・・・・・・・・・・・・・・	40
8. 1. 名称変更とキャッチコピーの検討	
8. 2. 情報発信戦略	
8. 3. 北海道動物園構想（案）	
9. 事業計画・・・・・・・・・・・・・・・・	43
10. 動物園附属施設(タンチョウ関連施設)の整備計画・・・・・・	44

はじめに

1975 年 10 月開設した釧路市動物園は、釧路湿原国立公園並びに阿寒国立公園に隣接した自然環境豊かな動物園として本年度 35 年を迎えました。

この間、国内最東端の動物園として、特別天然記念物のタンチョウや国内唯一展示しているシマフクロウなど、釧路ならではの動物たちの展示や野生動物の保護増殖事業にも力を発揮しています。

また、2008 年 5 月に開始した四肢に障がいを持ちながらも懸命に生きる、アムールトラの「タイガとココア」の人工保育の取り組みは、多くの方に「命の大切さ」を発信することとなり、さらに希少動物の生息環境の悪化を伝えていくことで、環境を考える教育の場として動物園が位置付けられるようになりました。

他方、来園者からは、老朽化した動物園の再整備や、動物たちの自然の行動特性を生かした展示の工夫などが求められています。

このような中、市民各層からのご意見や提言のもと、釧路市動物園の将来像を探り、また魅力ある動物園づくりを目指すため、『いのちとふれあい いのちをつむぐ』を基本理念とした「釧路市動物園基本構想」として策定し、今後のあり方と方向付けをお示ししました。

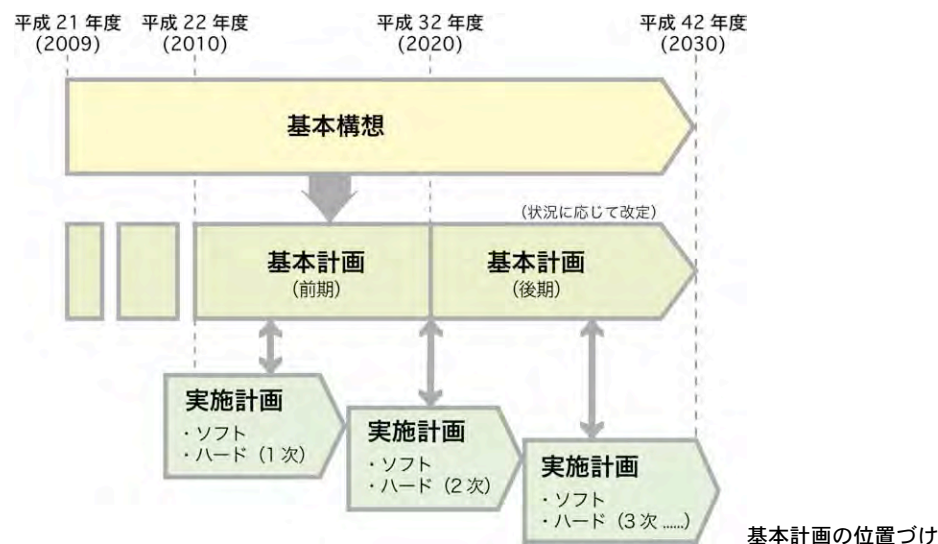
ここに策定しました「釧路市動物園基本計画」は、向こう 20 年間にわたる実施計画に結びつけるため、釧路市動物園基本構想をベースとして、さらに関係各位からのご意見をいただきながら、3つの目標、9つの基本方針を掲げ、「釧路らしい、何度でも来たくなる動物園」を目指していくものです。

また、「釧路市動物園基本計画」は、動物園内に設置の「タンチョウ保護増殖センター」はじめ、「丹頂鶴自然公園」並びに「阿寒国際ツルセンター」につきましても、動物園の付属施設として位置付け、動物園同様ハード・ソフトの両面にわたる可能性を具体化し再構築するため、ここにまとめるものです。

1. 基本計画の位置づけ

1.1. 基本計画の目的と位置づけ

本基本計画は、平成21年に作成された「釧路市動物園基本構想」を踏まえ、現状の課題を解決し、特性をいかした施設整備、取り組みを行っていく、より具体的な総合マスタープランとして位置づけられます。おおむね20年間の施設整備計画、その間の取り組みを示す長期計画となっています。従って、今後概ね20年の諸情勢変化を見ながら、実施した整備の評価のフィードバックなど必要に応じてある程度柔軟に対応していく長期計画となっています。

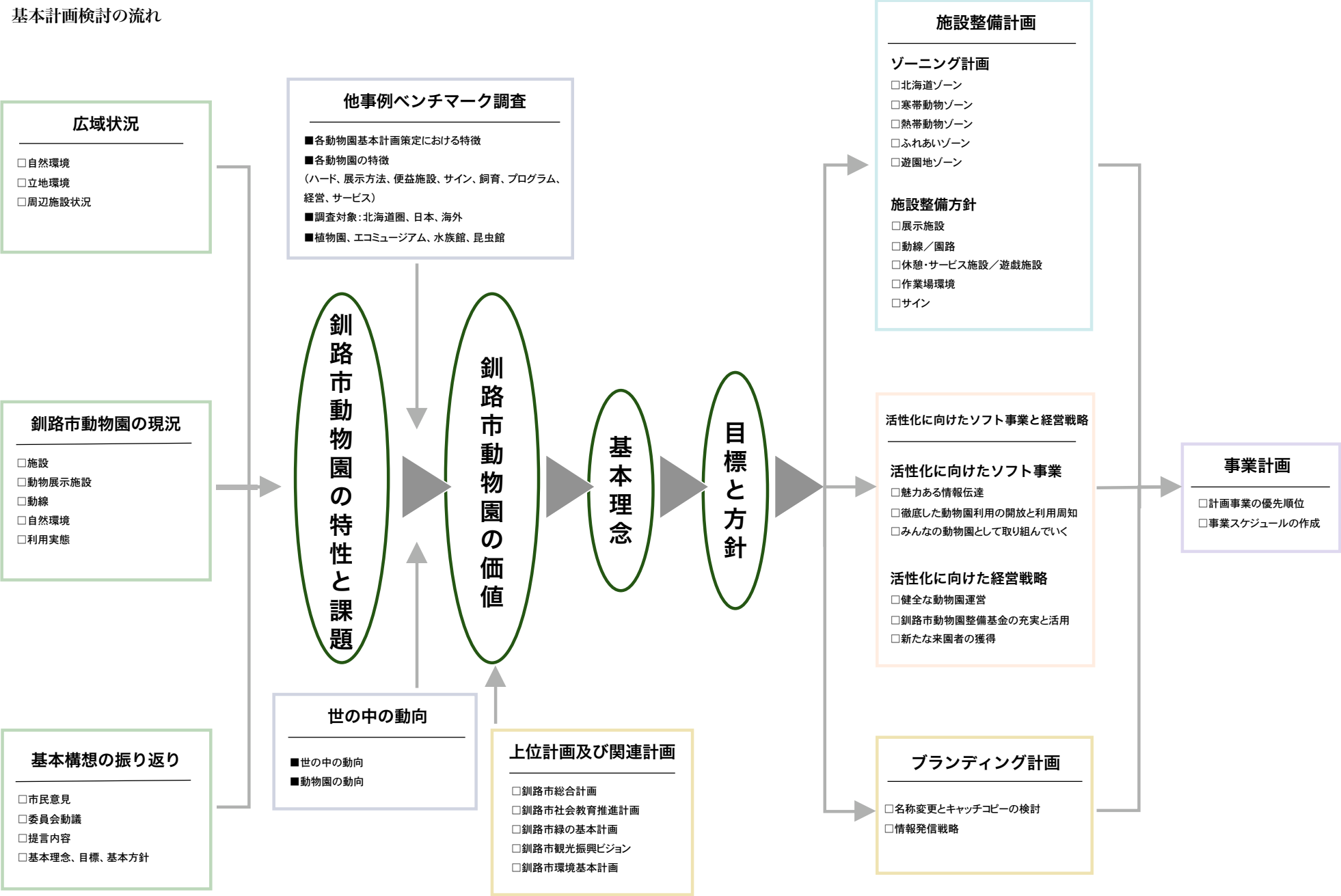


1.2. 基本計画の検討の流れ

本基本計画は、基本構想を元に、「市民委員会」「職員内部検討」を通しておこなわれています。まず、釧路市動物園の現状、広域的状況の把握を通し、「釧路市動物園の特性と課題」の整理を行い、他動物園や世の中の動向を踏まえ、釧路市動物園が独自に持つ価値の発見を行います。その独自の価値を生かす、理念、目標、基本方針の策定を上位計画との整合性をはかりながら検討していきます。その後、目標を達成する基本方針に従い、「施設整備計画」「活性化に向けたソフト事業と経営戦略」「ブランディング戦略」の検討を行い、それらを実行する事業計画の検討を行っていきます。

※ブランディングとは、一般的に企業が顧客にとって価値のあるブランドを創り上げるための活動のことです

基本計画検討の流れ



2. 釧路市動物園の現況

2.1. 釧路市動物園の概要

釧路市動物園は、釧路市の中心部である釧路駅より北西約 18.0km に位置し、昭和 50 年 10 月 1 日に国内最東端の動物園として北海道内 4 番目に開設されました。「タンチョウ保護増殖センター」も含めると 47.8ha という国内最大級の敷地面積を有し、豊かな森林環境、湿地環境の中、北方系動物や熱帯動物の飼育展示が行われるほか、遊園地機能を備えた道東地域のレクリエーション施設として位置づけられています。

また、広い敷地と動物園に蓄積された飼育繁殖技術を生かし、ケガなどで弱った野生動物の治療を行い、野生に戻す事のできない希少動物については非公開ゲージで繁殖させて子ども達を野生に戻す試みに取り組み、道東の野生動物の保護施設としても中心的な役割を果たしています。

動物園周辺には、「大規模自然観光レクリエーション地帯開発構想」に基づき整備された、「山花温泉 リフレ」「ホースパーク」「オートキャンプ場」といった施設が隣接し、レクリエーション施設としてそれぞれが市民に楽しまれています。



中央広場全景（平成 15 年当時）

2.2. 釧路市動物園の広域状況

1) 自然環境

釧路市動物園は、北に阿寒国立公園、東に釧路湿原国立公園が寄り添うように立地する、大自然の中の動物園です。また、阿寒湖から太平洋に注ぎ込む阿寒川の流域の一部に位置し、山と海とをつなげる一連の自然環境の中にあります。

キーワード：

大自然の中の動物園、山と海とをつなげる一連の自然環境の中にある動物園

2) 立地環境

釧路市動物園は、釧路市中心部より 18km 離れた位置にあるが、たんちょう釧路空港から 7km の距離に位置すること、「釧路湿原・阿寒・摩周シーニックバイウェイ」が隣接していることを考えると、ひがし北海道観光の玄関口としての立地環境にあります。



キーワード：釧路市中心部より離れた位置、ひがし北海道観光の玄関口

3) 周辺施設状況

釧路市動物園周辺には「大規模自然観光レクリエーション地帯開発構想」に基づき整備された、「山花温泉 リフレ」「ホースパーク」「オートキャンプ場」といった施設が隣接し、レクリエーション施設としてそれぞれが市民に楽しまれています。近年、それらの施設との連携した利用の促進や取り組み、情報発信などが始まってきたが、レクリエーション施設が隣接する潜在的価値を生かしきれていない現状があります。



周辺施設配置図

キーワード：

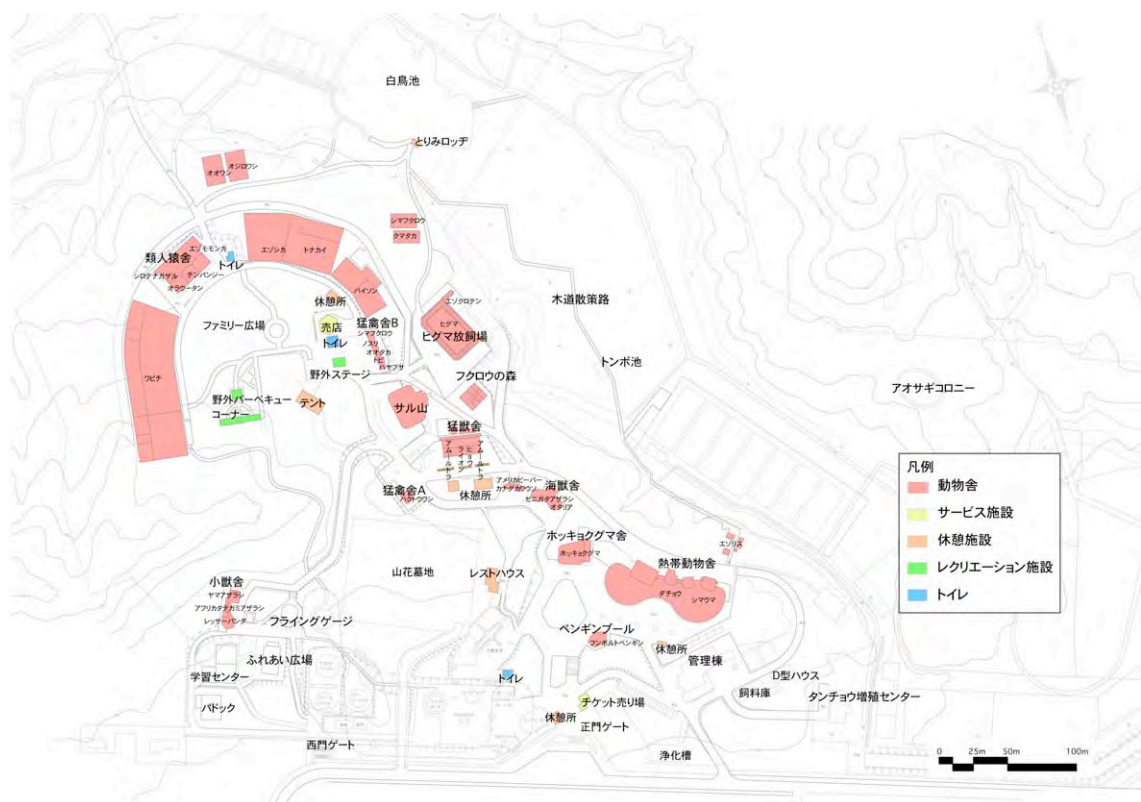
レクリエーション施設の隣接、さらなる連携取り組みが必要

2.3. 釧路市動物園内の現況

1) 施設

釧路市動物園内には動物展示施設だけでなく、サービス施設、レクリエーション施設、便益施設、遊戯施設、休憩施設などの施設があります。多くは昭和50年代に作られた施設であり、全体的に老朽化してきている状況にあります。レストランや一部遊戯施設が閉鎖となりサービス施設が不十分である現状にもあります。

他の動物園にはみられない、特徴的な施設としては、レクリエーション施設の一つである野外バーベキューコーナーがあり、市民に広く楽しまれている施設です。



施設平面図



破損している施設（デッキ）



新設された野外バーベキューコーナー

2) 動物展示施設

釧路市動物園内にある動物展示施設の多くも昭和50年代に作られた施設であり、全体的に老朽化してきている状況にあります。展示方法には、近くで動物が感じられないといった課題や、動物展示施設の配置自体にも一貫したコンセプトがないという課題があります。動物展示全体に関して何をどのように伝えていくのかという明確なコンセプトがないのが現状です。

一方で、近年、ヒグマの至近距離展示やエゾリスの行動展示等、身近な動物を近くで動きを感じられる動物展示施設の整備が行われ始めてきています。

また、釧路市動物園の動物展示施設は以下の大きな特性があります。

- ゾウ、キリンがいない一方で、シマフクロウ、ヒグマ、エゾリス等、北海道に生息する動物が充実している
- 近い気候で生息する寒帯動物が充実している
- 釧路の冷涼な気候に適応したビーバー、カワウソやトナカイなどの動物がいる



動物まで遠く、見下ろすタイプの展示

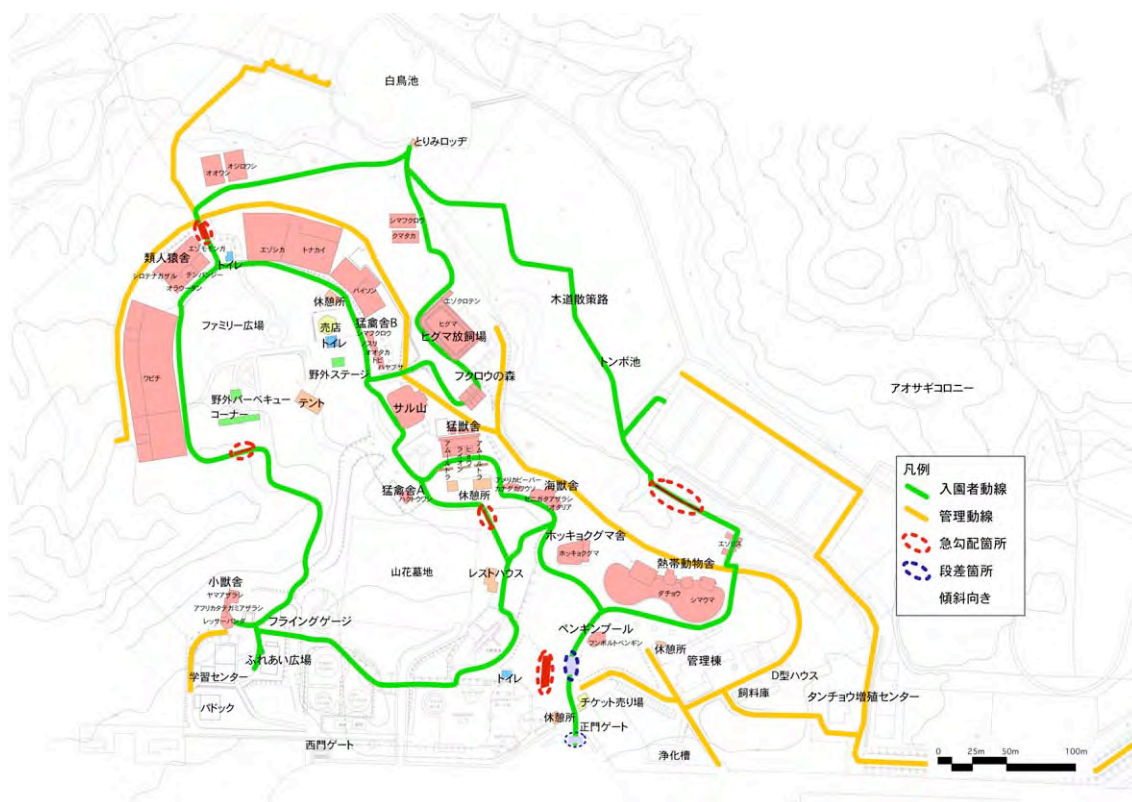


ヒグマの至近距離展示

3) 動線

動物園内の利用者の動線は、ゆったりと自由度をもって楽しめるものとなっており、北海道ゾーンでは特に、自然を楽しむことができる動線となっています。しかし、北海道ゾーンが整備される前までは、利用者動線と切り離されて裏にあった管理動線が、北海道ゾーン整備後、利用者動線と交錯する場所が出てきてしまっています。

また、園路自体も老朽化に伴い、破損が見られるとともに、段差や未舗装園路や急勾配などユニバーサル対応がされていない園路がみられます。駐車場から動物園正門まで距離があることや、動物園自体までの広域誘導にも課題があります。



動線平面図



破損がみられる舗装



急勾配な園路

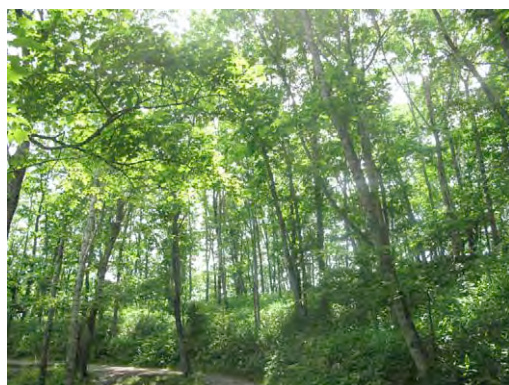
4) 自然環境

釧路市動物園内には、後背の森林とつながる豊かな自然環境があります。その中でも、釧路の大きな特徴である貴重な湿地環境があり、北海道ゾーンの整備により、その自然環境の豊かな動植物を観察できるようになっています。また、その自然環境をいかし、環境と一帯となった動物展示施設も一部にみられ、周囲の自然と共に楽しんでいます。動物飼育全般は、豊かできれいな地下水によって支えられており、その中で動物達も生き生きとした姿をみせています。

一方で、広がりのある自然環境をいかしきれておらず、北海道ゾーン以外の園内には緑が足りない状況にもあります。



自然環境図



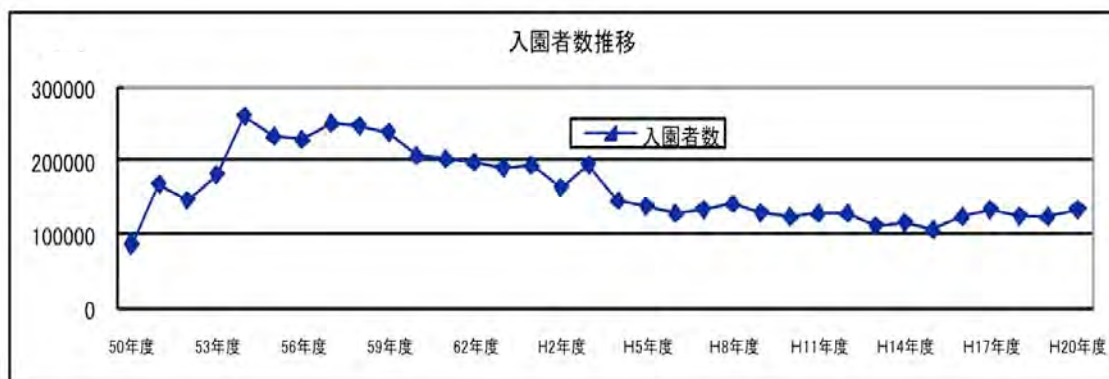
後背の森林とつながる豊かな自然環境



緑が足りない園内

5) 利用実態

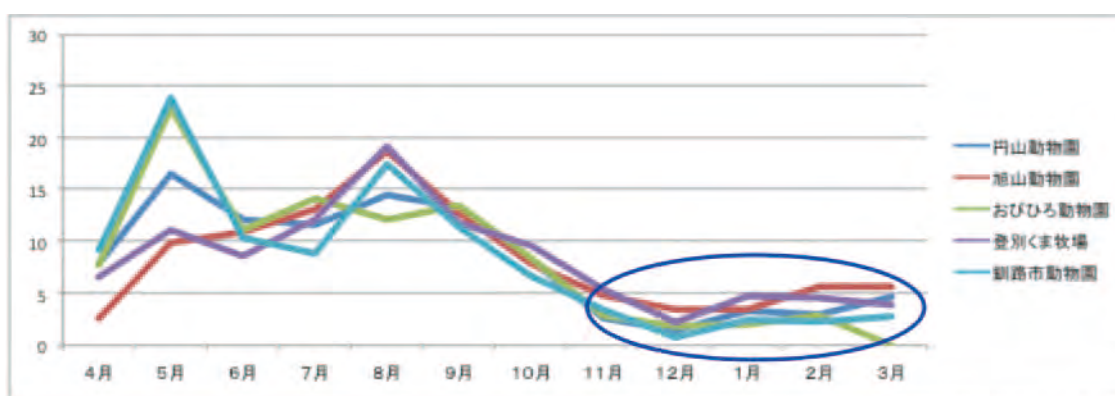
入園者数の推移



入園者数は昭和54年の261,099人をピークに減少に転じ、平成15年には103,721人まで落ち込みましたが、現在は12～13万人で推移しています。その中、アムールトラのタイガ・ココアの誕生の影響で平成21年には19万人に到達しています。

年間入園者数の推移

地元市民利用が多いため、観光客の変動との関係が見られない年間入園者の推移となっています。北海道の他動物園と比較しても冬期利用が少ない状況にあります。



月別入園者割合比較表(月毎の来園者/年間来園者%)

入園者の利用特徴

- ☐ 園内を散策してリラックスする意見が多く見られる
- ☐ 教育機関、福祉機関ともに団体利用が多い
- ☐ 北海道ゾーンの利用者満足度は低く、まだ魅力を伝えられていない状況にある
- ☐ 動きのある動物展示に人気が見られる
- ☐ 年1回以上来る入園者は半数以上でリピーターは既に多い

2.4. 釧路市動物園の特性と課題

釧路市動物園の現状の特性と課題は以下の通りに整理されます。

①立地	
特性 ・本物の大自然への入口 ・2つの国立公園に挟まれる立地 ・空港から7kmの距離に立地 ・レクリエーション施設が隣接している (山花温泉リフレ、ホースパーク、オートキャンプ場) ・阿寒湖から太平洋まで、山と海をつなげる一連の環境の中にある環境立地	課題 ・釧路市中心部から離れており、バスの本数も少なく不便であり、釧路市民にとっては、わざわざ行く場所 ・隣接したレクリエーション施設との連携取り組み不十分
②展示／動物	
特性 ・新しい展示始まる (エゾリス、エゾクロテン、ヒグマ) ・地元に生息する動物が多い ・寒帯動物が充実している ・高い飼育力、繁殖力	課題 ・老朽化してきた動物展示施設 ・ゾウ、キリンのいない動物園 ・作業場、バックヤードが狭い ・展示スペースが狭い ・一貫した動物展示コンセプトがない
③利用／施設	
特性 ・地元市民利用がほとんどを占めている ・園内を散策してリラックスという満足感がみられる ・教育機関、福祉機関ともに団体利用が多くみられる ・野外料理コーナー	課題 ・冬期利用が少ない ・初めての人は、北海道ゾーンに関して満足度が少ない ・電動でない簡単な遊び場がない ・雨や寒い日などのための屋内施設がない ・レストラン、カフェなどのサービス施設がない
④動線	
特性 ・ゆったりと自由度を持って楽しめる動線 ・自然を満喫できる園路	課題 ・急勾配、段差、未舗装園路あり ・駐車場から動物園の入口までの距離 ・管理動線と利用動線の交錯 ・動物園までの広域誘導が少ない ・入園者動線が定まらず、わかりづらい
⑤環境／景観	
特性 ・豊かな自然環境 豊かな林床植物 動植物 ・釧路らしい湿地環境 ・豊かできれいな水 ・敷地の広さ ・河岸段丘地形	課題 ・北海道ゾーンをのぞいて、園内自体に木陰が少ない ・広さ、自然の豊かさが生かしきれていない
⑥経営／取り組み／情報発信	
特性 ・入園者が増えると、食に対する物販やグッズ販売好調であり、今後、積極的に展開していける可能性あり ・企業連携がはじまってきた ・市民からの寄付やつながりが生まれ始めてきた ・夜の動物園のR18ガイドなど特徴のあるガイド ・職員による手作りサイン	課題 ・遊園地は今後、赤字を増やす方向に働いていく ・有料入園者を増やすには、観光客を取り込んでいく必要がある ・全体的に来園者、市民、外へのアピール不足 ・誘導サイン不足

3. 世の中の動向

3.1. 世の中の動向

現在、世の中の価値観に大きな変化が見られてきています。より多くの成長を求め、効率化、スピードを競ってきたこれまでから、安定／成熟、ゆとり、くつろぎ、個性、自然などを大切に考えるようになってきました。中でも、環境意識の向上は環境教育への関心の高まりにつながり、協働意識は、住民参加型の公共施設のあり方の検討や企業参加などにつながってきています。

これらの世の中の動向は、動物園の今後を考える上で、欠かせないポイントとなってきました。

1) 観光

近年、日本の観光客の動向は大きく変化してきています。少子高齢化で成熟した社会では、観光振興＝交流人口の拡大、観光需要の創出により地域経済を活性化させる動きが起きています。従来の物見遊山的な観光旅行に対して、テーマ性が強く、人や自然とのふれあいなど体験的要素を取り入れた新しいタイプの旅行と旅行システム、ニューツーリズムが注目されており、環境体験型のエコツーリズムはその代表格にあります。また、釧路市としても「釧路市観光振興ビジョン」に見られるように、観光への積極的な取り組みを始めています

旭山動物園を代表格とした動物園の観光資源としての可能性への取り組みが円山動物園などでも行われ始めています。

2) 企業の社会貢献活動

近年日本では、企業の社会貢献活動（CSR）が盛んに行われるようになってきました。活動内容としては、社会福祉、芸術・文化、教育、環境保全など様々な分野に渡って行われています。

円山動物園のように、企業による動物園への CSR としての参加が見られるようになってきました。これは、動物園が学術研究、教育、文化、環境といった多面的側面があるためだと考えられます。

3.2. 動物園の動向

これまで動物園は、子どものレクリエーション施設としての側面が強く、近年の少子化や珍獣の減少に伴い、全般的に来園者数の減少が見られてきました。そのような環境の中、日本動物園水族館協会が示す「レクリエーション」「教育」「自然保護」「研究」という4つの動物園の目的に「種の保存」「環境教育」の考え方が見られるようになってきました。

それとともに、動物展示の方法も近年大きく変化し、動物福祉の視点に立ち飼育動物の幸福な暮らしを実現するための環境エンリッチメントという考えがみられるようになり、それを実践した「行動展示」「環境一体型展示（ランドスケープイマージョン）」という動物展示方法が行われるようになってきました。

これにより、来園者が驚きと感動を感じ、環境教育へとつながっていく事で、旭山動物園に見られるように、大きな話題となり、動物園自体が復権してきています。



旭山動物園の行動展示



ズーラシアの環境一体型展示

4. 釧路市動物園の価値

これまでの「釧路市動物園の特性と課題」や「世の中の動向」を踏まえると釧路市動物園には、以下のような独自のすばらしい価値があり、これらを生かす計画づくりを行っています。

本物の釧路大自然の入り口 大自然の恵み 大自然の命

釧路らしい湿地環境

シマフクロウなど本物の自然の中の本物の北海道の動物

阿寒から太平洋まで、森と海とを結ぶ位置にある動物園

ひがし北海道における観光動線の入り口

敷地の広さ その中でのゆったり、のんびり感

47.8ha もの広大な敷地面積

動物を見るだけでなく、ゆったり自然観察をしたり、くつろぐことができる

豊富できれいな水

動物飼育を支える、きれいな地下水

きれいな水で生き生きとした動物達

高い飼育力 野生動物の保護活動

長年の蓄積による高い飼育力

地域を支える、野生動物の保護活動

市民、企業などとの連携のはじまり

始まってきた、寄付や奉仕活動

動物園整備基金の設立

5. 基本方針

5.1. 基本理念

「いのちとふれあい、いのちをつむぐ」

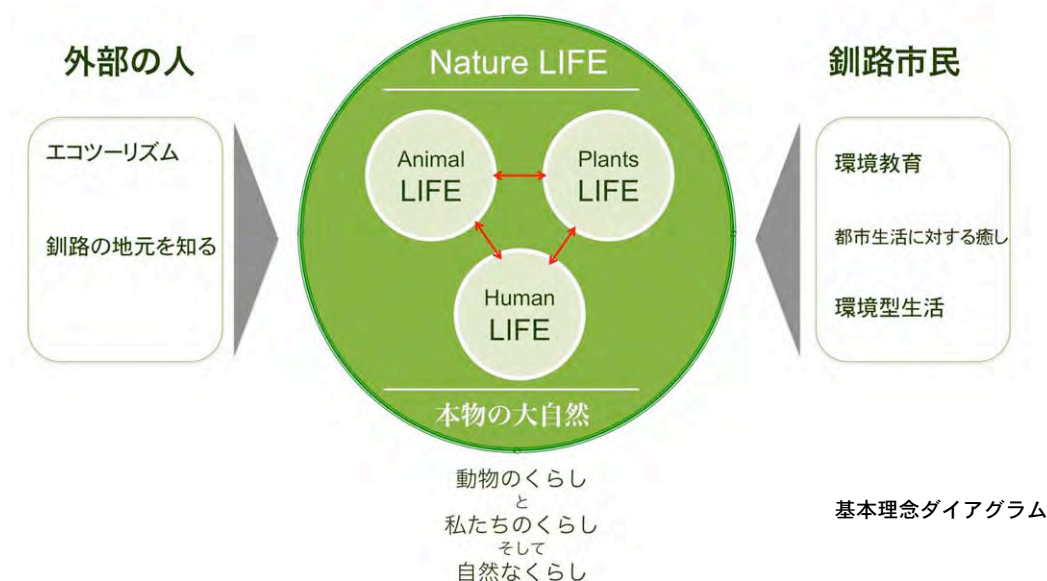
—何度でも来たくなる動物園—

自然とふれあうことから得られる感動や安らぎは人間性の回復をもたらし、豊かな心を育てます。そうした自然環境と都市機能の調和を図り、魅力あるまちづくりを進めるためには、自然に対する理解を深めることが不可欠です。

しかし今、人間の活動が野生生物を激減させ、地球環境を変え、めぐり巡って私たちの生活を脅かしています。かつて絶滅の危機にあったタンチョウを復活させた努力を、今度は野生動物が自力で生きていくために必要な生態系の保全に振り向けなければなりません。

たくさんの生き物が網の目のようなつながりの中で暮らしています。動物たちとふれあい、生き物相互のつながりの不思議やおもしろさを知ったとき、かけがえのない地球において人間もまた自然を構成する一員であり、共に生きていくことが私たちの生活を豊かにすることに気づかせてくれます。

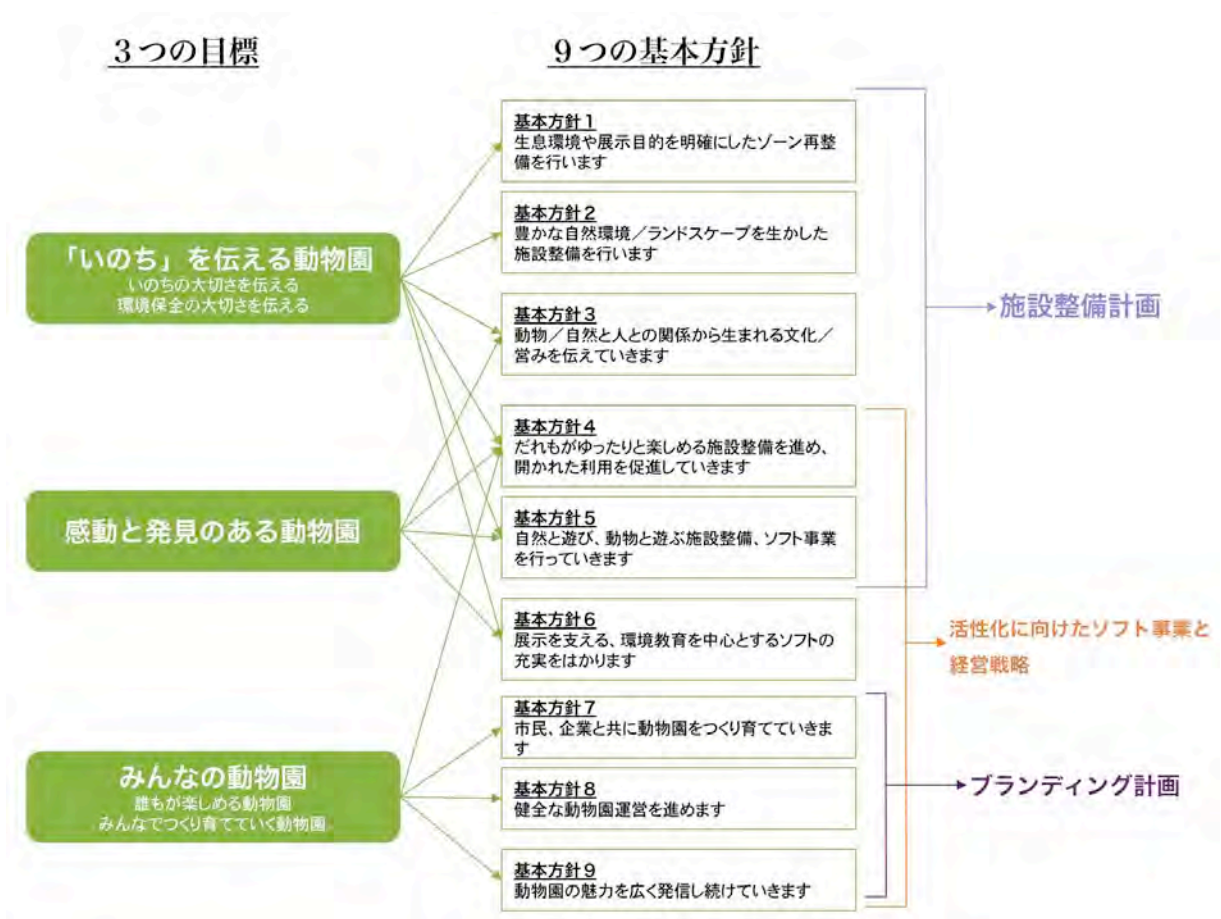
それぞれの生き物が伝えようとしているいのちとそれをはぐくむ自然にふれ、この豊かな環境を次代に残すために何が必要かを考えることができるよう、動物園はいのちとふれあい、いのちをつむぐ役割を担います。



5.2. 目標と方針

動物園には国籍、年齢を問わず、たくさんの方が来園されます。どのような方がいつ訪れても、動物園から帰るときには「楽しかったね、また来ようね」と言ってもらえる動物園でありたい。楽しかったからまた行ってみたいという気持ちを持ち続け、何回行っても新しい発見がある、釧路市動物園でしか味わえない経験や感動がある、そんな動物園でありたいと願っています。

釧路市動物園は、基本理念に沿って次の3つの目標と9つの基本方針にて動物園づくりを進めていきます。



目標と方針の関係

目標1：「いのち」を伝える動物園

生きている動物を通して動物園は、いのちの大切さを伝えます。目の前にある「いのち」と「いのちのつながり」をとおして、さまざまな動物たちをはぐくんできた多様な自然環境とその保全の大切さを伝えていきます。

1) いのちの大切さを伝える

動物園では、一般家庭で飼育することのできない危険な動物や大型の動物ばかりではなく、親しみやすい小さな動物までさまざまな動物の誕生から死までを伝えていきます。動物との出会いから生まれる動物への興味や関心が、新たな好奇心や想像力を刺激し、いのちや自然のいとなみの不思議さを気づかせてくれます。

2) 環境保全の大切さを伝える

地球温暖化の影響をもっとも受けやすい寒帯地域に暮らす動物たちが、今、絶滅の危機にあります。釧路という冷涼な気候を利用して、こうした動物たちの飼育・繁殖を進め、地球規模の環境保全について考えていきます。

それとともに、私たちの住む道東に生息するシマフクロウ、タンチョウをはじめ希少動物の野生動物としての存在感や力強さを伝え、命や環境問題について考えるきっかけとしていきます。

また、野生動物の保護・野生復帰活動を継続的に行っていき、この活動を通して身近な環境保全の大切さを伝えていきます。

目標2：感動と発見のある動物園

来園者誰もが期待することは、動物たちが活発に動き、いきいきと暮らす姿を見ることです。子どもたちが目を輝かせて夢中になるような動物との出会いは、それを見守る大人にも満足感をもたらし、かつて子どもであったころの感動がよみがえることにもなるでしょう。

そのためには、動物たちがいきいきと暮らし、安心して子どもを生み育てられるように環境を整備し、見せ方や解説を工夫することで、現在飼育している動物のこれまで気づかなかった行動を見てもらえるような展示が必要です。動物たちにストレスを感じさせることなく、いきいきとした行動を再現できれば、入園者の満足度を高めることができます。同じ目線で間近に見せる展示は動物との距離を縮め、あらたな感動と発見につながっていきます。

目標3：みんなの動物園

1) 誰もが楽しめる動物園

当園の特徴である広い敷地を最大限に活用し、既存の自然景観を生かしながらゆったりと動物たちが配置された園内で過ごすことで、日常の暮らしから離れ、開放感を味わいながら動物たちと出会うことができます。

そのためには、1日をゆつくりと過ごすことのできる休憩施設はもちろん、誰もが安心して園内を移動できるようなユニバーサルデザインに配慮した園路や案内板を整備し、移動手段や利便施設の充実と同時に、ガイドスタッフの配置等ソフト面での対応も必要です。

2) みんなでつくり育てていく動物園

誰もが楽しめるとともに、みんなに関わり、みんなでつくり育てていく動物園を目指していきます。

基本方針 1：生息環境や展示目的を明確にしたゾーン再整備を行います

動物を生息環境ごとに分け、動物展示施設を配置していく事で、その動物の生息環境や行動、人との関わりを分かりやすく伝え、環境教育にもつなげていきます。

基本方針 2：豊かな自然環境／ランドスケープを生かした施設整備を行います

釧路市動物園は、豊かな自然環境に囲まれた動物園です。通常の〇〇館といったような建築施設にたよった動物展示施設ではなく、この自然環境、ランドスケープをいかした動物展示を行い、ランドスケープとしてそのまま丸ごと伝えていきます。

基本方針 3：動物／自然と人との関係から生まれる文化／営みを伝えていきます

動物が生息する環境ごとに、動物の生態が異なるように、人の文化や営みも異なります。その中でも、その動物や自然とそこに住む人との関わりから生まれてくる文化／営みを動物展示とともに伝えていきます。

基本方針 4：だれもがゆったりと楽しめる施設整備を進め、 開かれた利用を促進していきます

自然豊かな広い環境をだれもがゆったりと満喫できるようユニバーサルデザインに配慮した園路、サイン等の施設整備を行っていきます。それとともに、誰もが動物園をプログラムやイベント等で利用できるよう、利用を開放し、様々な利用／活動が動物園内で展開されていく事を促進していきます。

基本方針 5：自然と遊び、動物と遊ぶ施設整備、ソフト事業を行っていきます

森や湿地などの自然環境を生かした遊び場を整備する事で、自然環境をより身近に感じられるようにしていきます。それとともに、動物展示施設内にある動物のための遊び場と同じ遊び場を園内に隣接させる事で、動物と同じように遊んでいる感覚を生み出し、動物への興味や新たな発見を生み出します。

基本方針 6：展示を支える、環境教育を中心とするソフトの充実をはかります

日々の動物飼育活動においての観察、記録、研究を通し、来園者により動物への理解を深めてもらえるよう、解説員によるガイドの充実、視聴機器の貸し出し、手作り解説板の整備を行っていきます。それと同時に、夜間動物園や、裏側探検など参加型イベント、学校教育との連携プログラムの充実を図り動物園への関心を高めます。

基本方針 7：市民と共に動物園をつくり育てていきます

タイガ・ココアを契機に、様々な市民や企業などの団体が動物園に対してご協力をいただき連携しはじめてきています。これを契機により充実した市民と共にある動物園をつくり育てていけるよう、多様なメディアを使い情報発信を行い身近に動物園を感じる事ができるようにします。それとともに、市民や企業などの団体が関わる事ができる環境を作り出していきます。

基本方針 8：健全な動物園運営を進めます

入園料や遊戯施設収入の増を図る一方で、経費節減に取り組む必要があり、動物園自身の節減努力と共に、個人や団体、企業に対しても物心両面にわたる支援を求めながら、魅力ある動物づくりに向けた管理運営を行なっていきます。

リピーターを増やしていくとともに、周辺施設との連携、観光客の誘致、冬期利用の促進を図り、収入増を目指していきます。

基本方針 9：動物園の魅力を広く発信し続けていきます

釧路市動物園にある魅力が明確に伝わる、ロゴ、名称、キャッチフレーズなどの検討を行い、それを明確に伝えていきます。継続的に旬な情報など広く魅力を伝えていくとともに、市民、観光客、子ども、大人などターゲットを明確にし、それごとに訴求する伝達方法を検討していきます。

6. 施設整備計画

6.1. ゾーニング計画

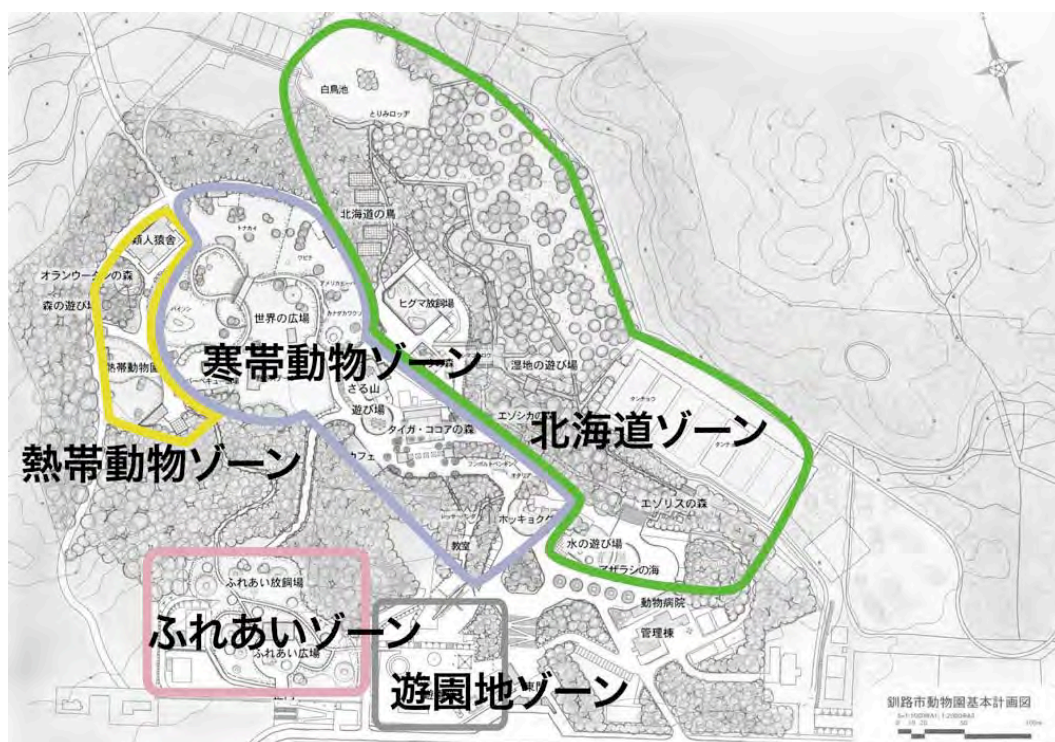
基本方針1：生息環境や展示目的を明確にしたゾーン再整備を行います

基本方針2：豊かな自然環境／ランドスケープを生かした施設整備を行います

基本方針3：動物／自然と人との関係から生まれる文化／営みを伝えていきます

基本方針5：自然と遊び、動物と遊ぶ施設整備、ソフト事業を行っていきます

動物舎の老朽化に伴ない、今後は改修や改築が不可欠になりますが、動線を考えながらゾーンごとにテーマを設定し、それに合わせて現在飼育している動物の再配置を行います。しかし、動物が死亡した場合の補充は年々難しくなっています。その場合はそれぞれの展示目的に合った手に入りやすい別の動物に代えていくことも必要となります。



ゾーニング図

1) 北海道ゾーン ～ふるさとの動物たち～

本物の北海道の自然の中に生息する動物展示を行います

北海道ゾーンの豊かな自然環境を生かし、北海道に生息する動物を鳥類、昆虫、植物などを含めた生態環境として展示していきます。釧路市民にとっては、暮らしの中で身近であったり、見ることはあるが、近くでは見るできないような動物達の新たな動きや生態などを再発見することで、身近な動物との関係性、生活を考えるきっかけとなります。それとともに、外の人にとっては、地元の自然環境を知り学ぶ、エコツーリズムのような要素にもなります。

森から海へつながる流域として、一連のつながりを伝えていきます

釧路市は阿寒から太平洋まで、森から海まで一連の流域を抱えており、釧路市動物園もその流域の中にあります。「森は海の恋人」と言われるように、森と海との環境は独立した関係ではなく、密接な関係にあり、その関係がわかるよう、海から森まで、一連のストーリーで伝える動物展示施設配置、サイン計画としていきます。



阿寒から太平洋までの流域

アイヌの人たちの自然や動物との関わり、文化を伝えていきます

先住民族アイヌの人たちは、人間に恵みをもたらす動物たちを「カムイ」として敬意を払い、自然と共に暮らすための数々の知恵を受け継いできました。こうした考え方はこれからの地球環境保全に大きな役割を果たすと考えられ、自然との共生モデルとして動物の展示を通して伝えていきます。

サインなどだけでなく、舗装のパターンなどにアイヌ文様を施す事などで、ランドスケープとしてアイヌ文化を伝えていき、その中での動物とのかかわり合いについてしっかりと伝えていきます。



アイヌの伝統衣装



アイヌの伝統工芸

展示動物

ゼニガタアザラシ、ヒグマ、エゾリス、エゾシカ、タンチョウ、シマフクロウ、エゾクロテン、エゾモモンガ、オジロワシ、オオワシ、クマタカ、ハヤブサ、トビ、オオタカ等

主要な施設

アザラシの海、水の遊び場、エゾリスの森、タンチョウケージ、エゾシカの森、クロテン／エゾモモンガ舎、シマフクロウの森、フクロウの森、ヒグマ牧場、木道、とりみロッジ、湿地の遊び場等

2) 寒帯動物ゾーン ～寒さを生きる知恵～

地球温暖化の影響を最も受けやすい寒帯動物の展示を通して、私たちにとって身近な「寒さ」から、地球規模での環境問題を振り返るきっかけを作ります。

希少種の繁殖活動の一翼を担います

寒帯動物にはホッキョクグマやアムールトラなど希少種が多く、釧路の冷涼な気候を生かした繁殖活動の一翼を担うことで国際希少動物の保全に貢献していきます。また、トナカイのように本州では繁殖しにくい動物の繁殖群を維持し、全国の動物園に供給していく基地となることもできます。アメリカビーバーやカナダカワウソなどの北方系動物の繁殖を進めていきます。

湿地環境に生息する動物の本来の生き生きとした姿を見せていきます

北海道ゾーンの環境に似た湿地環境に生息するアメリカビーバー、カナダカワウソの展示を豊富なヤナギ、水を活用し充実させ、動物本来の生き生きとした姿を見せるような展示を行っていきます。



ビーバーダム



カワウソの生き生きとした動きを楽しむ

タイガ・ココアの森を造成し、環境活動へ取り組みます

アムールトラは、生息する針葉樹林が、人により伐採されることで生息環境が失われ、国際希少動物となっています。タイガ・ココアは釧路市動物園で生まれ育ち、本来自分たちが生息する針葉樹林帯を知らずにいます。

市民と共に動物舎の中や周辺に針葉樹を植樹し、樹林形成活動をする事で、本来の生息環境に近い環境を作り出すとともに、市民にとって自然環境に対して考えるきっかけを提供します。



森の中で生き生きと遊ぶアムールトラ



アムールトラの住む森

同じ寒冷気候の世界の文化を伝えていきます

同じ寒冷気候に住むイヌイットやアメリカ先住民の文化をトナカイ、アメリカバイソン等との関係を通して伝えていきます。我々やアイヌの文化との比較をし理解していく事で、それぞれの環境や動物との関わり合いの理解を深めます。



インディアンの文化とバイソンの展示



イヌイット文化の展示

展示動物

ホッキョクグマ、オタリア、フンボルトペンギン、アムールトラ、ニホンザル、アメリカビーバー、カナダカワウソ、ワピチ、トナカイ、アメリカバイソン、レッサーパンダ等

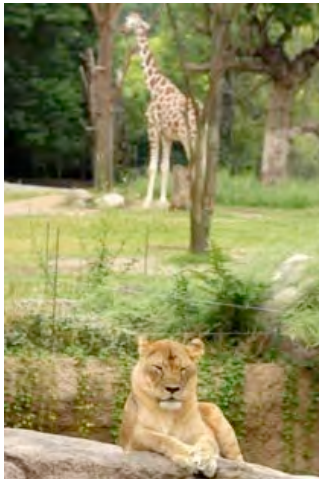
主要な施設

ホッキョクグマ舎、オタリア／フンボルトペンギン舎、タイガ・ココアの森、サル山、
ビーバー／カワウソ園、世界の広場、レッサーパンダの森、遊び場、カフェ等

3) 熱帯動物ゾーン ～多様な環境・多様な生き物～

生き物のつながりを伝えます

熱帯では多種多様な生物が、網の目のようにつながりながら住み分けるという、寒帯とはまた違った暮らしがあります。キリンやシマウマなどの草食獣と、それらを餌とするライオンなどの肉食動物を同じエリアで展示することで、生き物のつながりを伝えていきます。



生き物のつながりを伝える展示



シマウマとキリンの共生展示

施設維持の面からできるだけ施設をコンパクトにまとめます

ダイナミックな展示や、冬期に暖をとりながら動物を観察できる施設という重要性に配慮するとともに、維持管理の面から、できるだけ施設をコンパクトにまとめていきます。

展示動物

チンパンジー、オランウータン、シロテテナガザル、ヒョウ、ライオン、キリン、ダチョウ、シマウマ、ヤマアラシ等

主要な施設

類人猿舎、草食動物と猛獣広場等

4) ふれあいゾーン ～いのちにふれる～

小動物や家畜など身近な触れ合いができる場所とします

動物を実際にさわることで温かみを感じ、相手を思いやる心をはぐくむことができるよう、現在のこどもどうぶつえんを充実させながら、幼児でも安心して利用できる安全性と衛生面に配慮した整備を行ないます。子どもの目線に合わせた施設作りとともに、子どもたちを見守る保護者への配慮も必要です。

さわれなくても間近に動物を見ることで新しい発見や動物への関心を持てるような、あるいは動物を題材にした絵本や遊びをとおして多面的な動物への関心をはぐくめるような、こどもの特性に合わせた工夫をしていきます。



ヤギとのふれあい



広々としたふれあい広場

小動物や家畜の本来の動きや姿を伝えます

小動物や家畜などと身近な触れ合いをするだけでなく、それらの動物を広い場所に放牧することで、動物本来の動きや姿を伝えていきます。



ヤギの放牧



野生化したウサギ

展示動物

ウサギ、ヤギ、ポニー、アルパカ等

主要な施設

触れ合い動物舎、図書館等

5) 遊園地ゾーン

開園以来、園内ののりもの広場は、釧根地方唯一の総合的遊園地として親しまれてきました。道内の遊園地やテーマパークの増加、交通手段の高速化、レジャーの多様化、さらには少子化の進行もあって、近年の遊具利用者数は大きく減少しました。

そのような状況の中、今後も引き続き地域における身近な娯楽施設としての役割を担っていくとともに、電動遊具の集約化、コンパクト化、幼児・児童が利用しやすい中・小型遊具への更新を図ります。また、園内に分散する形で、自然環境や動物に関係した体験学習型遊具施設を充実させるなど、動物園ならではの「楽しみ」を増幅させていきます。

6.2. 施設整備方針

基本方針 2： 豊かな自然環境／ランドスケープを生かした施設整備を行います

基本方針 4： だれもがゆったりと楽しめる施設整備を進め、
開かれた利用を促進していきます

基本方針 5： 自然と遊び、動物と遊ぶ施設整備、ソフト事業を行っていきます

1) 展示施設

4つの基本的な展示形状



豊かな自然環境／ランドスケープを生かし動物の生息する自然環境に人が入り込んだり、通り抜ける事で、動物を見るのではなく、体感する展示方法を行います。また、動物が人の方へ飛び出してくる事で、身近に動物を感じられるとともに、驚きや発見を生み出します。それと共に広がりの中にある動物に囲まれる中ゆったりと動物を感じる展示方法を行います。

高低差のある地形を生かした展示

河岸段丘の高低差のある地形を生かし、上から眺めたり、下から見上げたりなど高さの違うところから楽しむ事ができる展示方法を行います。

環境エンリッチメントの実施

大きな施設改修を行うまでの期間や大規模な改修を行わない施設において、動物福祉の視点に立ち飼育動物の幸福な暮らしを実現するため、小規模ながらも様々な施設の改善や餌やり方法の改善などできることから取り組みを行っていきます。

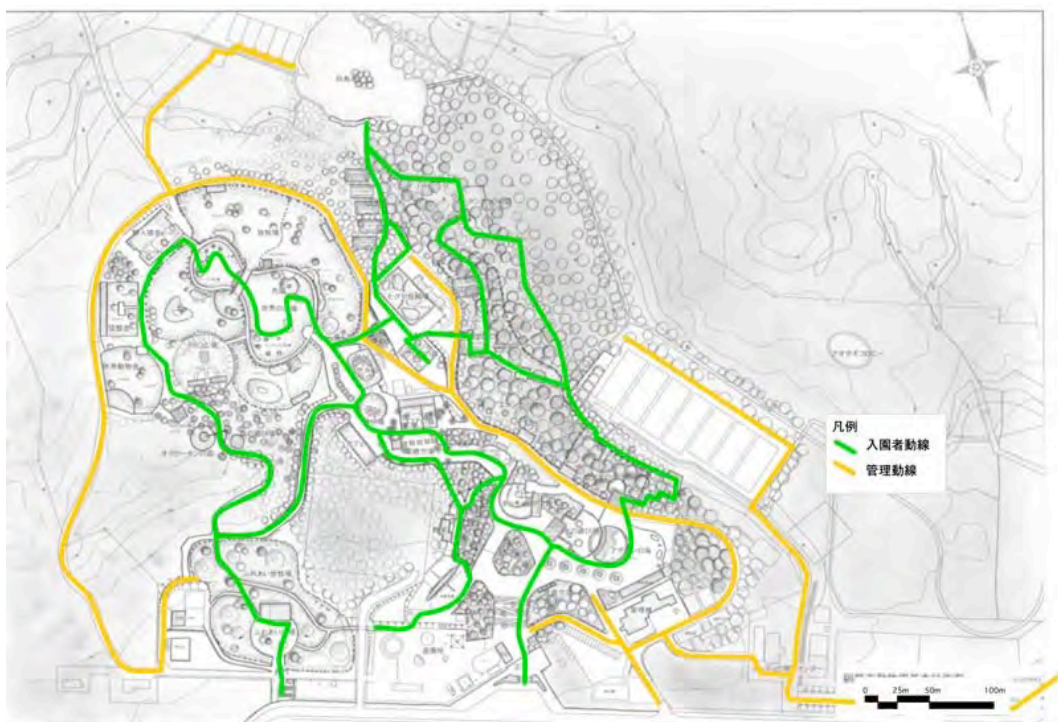
2) 動線／園路

ユニバーサルデザインに配慮していきます

車いすやベビーカーを含め、安全・安心、快適に利用できるように、極力園路を舗装、段差、勾配に配慮し、ユニバーサル対応していきます。だれもが、自分の行きたいところに自由にいけるように、サインと連動した舗装面上のサイン表示等にも取り組んでいきます。

来園者動線と管理動線の交錯を極力改善していきます

来園者動線と管理動線の交錯がないよう動線計画を見直します。交錯が改善できない部分では、ゲートの設置や明確に来園者が優先であるとわかる舗装にする等、施設的な改善を行います。



動線計画平面図

3) 休憩・サービス施設／遊戯施設

休憩施設

園内での快適な利用ができるよう、各所にベンチ等の休憩施設を設けるとともに、冬期に備え現在の屋内休憩施設を充実させていきます。また、現在のレストハウスを学校などの団体利用ができ、周りの自然環境を満喫できる教室へと改修することを検討していきます。

休憩施設の設置場所に関しては、ゆっくりと休憩しながら動物を観察できる事に配慮した構造と位置としていきます。

サービス施設

カフェなどの飲食施設の充実した整備を検討していきます。また、一カ所集中だけではなく、分散し無人形式でも飲食がとれる施設整備も併せて行っていきます。

売店での物販についても、その内容を見直し、より環境教育につながるような物販や地元の事がわかる物販内容への変更を検討していきます。

遊戯施設

遊園地ゾーンだけでなく、園内の随所に幼児・児童でも簡単に遊べる環境体験型遊具を整備していきます。湿地環境の中で遊ぶ「湿地の遊び場」、サルなど動物と共に遊ぶ遊び場などの整備を進めていきます。



豊かな環境での遊び場



湿地の遊び場

4) 作業場環境

動物展示施設の整備や改修とともに、バックヤードなどの作業場環境を改善していきます。

5) サイン

園内移動の快適性の向上

わかりやすい動線と共に園内を迷う事なく、自由に移動できる事をサポートする案内板や誘導サインを充実させていきます。

魅力的な園内情報提供の充実

プログラム情報や動物の旬な情報を充実させていきます。また、これまでの手作りの動物解説をより充実させていき、温かみのある情報伝達を行っていきます。

行動を起こす事で伝える、ハンズオン型のサインや舗装面など思わぬところから出るサインを充実させていく事で、来園者の驚きや発見を促していきます。



動物解説の舗装面



ハンズオン型サイン

7. 活性化に向けたソフト事業と経営戦略

7.1. 活性化に向けたソフト事業

基本方針4：だれもがゆったりと楽しめる施設整備を進め、
開かれた利用を促進していきます

基本方針5：自然と遊び、動物と遊ぶ施設整備、ソフト事業を行っていきます

基本方針6：展示を支える、環境教育を中心とするソフトの充実をはかります

基本方針7：市民と共に動物園をつくり育てていきます

1) 魅力ある情報伝達

環境教育プログラムの充実

これまでのガイドプログラムをより充実させるとともに、特に環境教育プログラムを充実させていきます。これは、市民にとっては環境教育につながり、外部の人にはエコツーリズムにもつながっていきます。

幅広い人へ伝え、より深い興味へつなげるため、「セルフガイドプログラム」「ガイドプログラム」「体験プログラム」「講座プログラム」など多様なプログラムを用意し、来園者を動物や自然環境への「興味」から「関心」そして「環境行動」へとつなげていきます。

これらのプログラム実施の蓄積のもと教育機関と連携し独自の環境教育教材の開発も検討していきます。



環境教育プログラム



ガイドプログラム

野生動物保護活動の周知

釧路市動物園では、タンチョウを中心とする野生動物の保護活動、野生復帰へ取り組んできています。しかし、これは一般的にあまり知られていない状態にあります。これからは、動物園内の動物を見せ、命の最前線にいる活動をしっかりと伝えていきます。



野生のタンチョウの保護活動



野生復帰を目指す動物

利用備品の貸出し

豊かな自然環境の広い園内を満喫できるよう、バードコール、双眼鏡など、自然観察備品やレジャーシート、ハンモックなどレクリエーション備品の貸し出しの実施を検討し、動物園内の利用啓発を行っていきます。



森の中でのバードコールの利用



森の中でのハンモック

2) 徹底した動物園利用の開放と利用周知

イベント等の活動利用の積極的誘致

釧路市動物園自体の利用促進、情報発信、集客のため、誰もが動物園をプログラムやイベント等で利用できるよう、利用を開放し、様々な利用／活動が動物園内で展開されていく事を促進していきます。様々な活動やイベントを開催、活用したいと思っている市民や団体は実は多いと考えられます。この利用開放によって、利用の可能性を広げ、新たな動物園利用の可能性をみていきます。



積極的なイベント誘致



様々な活動を展開

3) みんなの動物園として取り組んでいく

市民とともにある動物園の取り組み

市民と共に下記の取り組みを行っていきます。

「ガイドボランティアの育成」

ガイドボランティアの育成プログラムを実施し、園内ガイドを充実したものとしていきます。

「アニマルファミリー制度の導入」

アニマルファミリー制度を導入し、動物への愛着を育み、市民協力を促していきます。

※アニマルファミリー制度とは、動物への愛着や理解を深めてもらうために支援を募る制度のことです。

「整備自体への参加」

植樹活動、舗装整備、園内サイン作成など市民参加型プログラムの実施を通して動物園整備に参加できる機会を創出していきます。東京都の都市公園事業で行われている「思い出ベンチ」、岩見沢駅舎における「レンガへの名前の刻印」など寄付型の整備プログラムの検討も併せて検討していきます。



市民参加による舗装整備



岩見沢駅舎のレンガの寄付

周辺施設とともにある動物園の取り組み

園内をホーストレッキングの一部として利用するなど、周辺レクリエーション施設との連携を強化し、お互いにとってメリットとなるような取り組みを実施していきます。

地域とともにある動物園の取り組み

釧路の大きな特徴である、農業、漁業関係者／団体と連携した取り組みを検討していきます。また、教育機関と連携し、調査研究の場として提供するだけでなく、学習団体利用の場としての利用を促進していきます

近年の企業 CSR の動向を見ると、動物園と企業の連携はお互いにメリットのある可能性を秘めており、積極的に企業連携に力を入れて取り組んでいきます。

7.2. 活性化に向けた経営戦略

基本方針 7：市民と共に動物園をつくり育てていきます

基本方針 8：健全な動物園運営を進めます

基本方針 9：動物園の魅力を広く発信し続けていきます

1) 健全な動物園運営

動物園予算は「動物園事業特別会計」として独立しています。平成 20 年度の総事業費 3 億 3,000 万円のうち、収入は入園料 3,000 万円と遊具使用料 2,400 万円であり、残りは一般会計からの繰り入れです。支出は人件費 1 億 4,000 万円、委託費 8,600 万円、飼料費 3,000 万円、光熱費 2,000 万円、工事費等 2,500 万円、公債費 1,600 万円、その他 1,300 万円となっています。

健全な動物園運営に向けて、支出減、収入増を目指します。

2) 釧路市動物園整備基金の充実と活用

釧路市動物園の価値、魅力、取り組みの周知の徹底のもと、平成 21 年に設置された「釧路市動物園整備基金」を充実したものとし、基本計画に基づいた施設整備や動物購入に当て活用していきます。

3) 新たな来園者の獲得

社団法人日本動物園水族館協会では所在地の都市人口数を入園者数の目安としています。そこで当面 10 年で釧路市の想定人口である 16 万人の入園者を目標にしながら、最終的には基本計画に沿った改革の推進により、新たな来園者の増加を加味し 20 年後に 18 万人の達成を目指したいと考えます。

従って、リピーターの充実を図るとともに、新たな来園者の獲得を目指します。広く動物園の魅力を伝えていくとともに、ターゲットを明確にし、それに応じた対策を図っていきます。

様々なイベントの促進

イベント活動の実施は、これまで来園しなかった人に来園機会をもうける事につながるため、積極的に市民協力のもと様々なイベントの実施を促進していきます。

観光客の誘致

釧路市動物園は立地、自然環境、展示動物内容ともに観光資源として活用できる可能性を秘めています。このため、旅行者をターゲットとした広告・宣伝活動を強化していきます。

修学旅行の誘致

現在、増えつつある釧路市動物園への修学旅行を積極的に誘致し拡大していく事で、来園者数の増加を目指していきます。これは、単なる来園者増につながるだけでなく、教育面での取り組みの充実にもつながります。

8. ブランディング戦略

基本方針7：市民と共に動物園をつくり育てていきます

基本方針8：健全な動物園運営を進めます

基本方針9：動物園の魅力を広く発信し続けていきます

8.1. 名称変更とキャッチコピーの検討



みんな幸せ、動物園。

検討案

これまでの検討の中にあつた、釧路市動物園の価値をしっかりとわかりやすく伝えていく、動物園自体の名称やロゴ、キャッチコピーについて検討を行っていきます。

※ここで提案している「釧路自然動物園」は、豊かな自然環境の中にある動物園である事を一番わかりやすく伝える名称になっています。ロゴ自体は、「いのち」を伝えるハートが折り重なり、幸運の4つ葉のクローバーになっています。また、広がりのある豊かな環境の中、生き生きと過ごす動物達、それらを見ながら来園者も幸せになることから、キャッチコピーを「みんな幸せ、動物園。」としています。

8.2. 情報発信戦略

釧路市動物園が持つ価値／魅力を、来た人がまた来たいと思える情報発信方法、これまで来ていなかった人に新たに来たいと思える情報発信方法を大きく市民への周知と観光客への周知へと分けて検討していきます。

1) 徹底した市民へ周知

常に旬な情報をタイムリーに届ける事が重要になってきます。従って、以下の情報発信の方法を検討していきます

- ☐わかりやすい魅力的なホームページ
- ☐スーパーなど日常、釧路市民が生活の中で利用する施設における掲示
- ☐口コミにつながる、魅力的なパンフレットの作成

2) 観光客への周知

立地条件としては、観光地となる可能性を秘めているが、そうっていない現状を考えると、観光客へ基本的な情報が周知されていない事が考えられます。従って、以下の情報発信の方法を検討していきます。

- ☐宿泊施設、飲食施設、旅行代理店、空港等における情報発信の充実
- ☐積極的なマスコミの活用
- ☐釧路市動物園までのわかりやすい誘導
- ☐多言語に対応する案内の充実

8.3. 北海道動物園構想（案）

北海道には全国的に有名な旭山動物園をはじめとする動物園があるだけでなく、北海道ならではの豊かな自然環境を代表する国立公園／国定公園の大自然があります。それぞれの動物園と国立公園／国定公園の大自然が連携する事で、北海道の動物の魅力を充実して伝えることにつながります。それとともに、それぞれの立地と特徴を生かしながら連携する事で、北海道全体の動物園の質の向上にもつながり、相互利益のある取り組みとなります。

こういった連携の取り組みをはかる北海道動物園構想（案）」の検討を行っていきます。



北海道動物園構想（案）

9. 事業計画

本基本計画は、おおむね20年間の施設整備計画、その間の取り組みを示す長期計画となっています。従って、今後概ね20年の諸情勢変化を見ながら、実施した整備の評価のフィードバックなど必要に応じてある程度柔軟に対応していきます。

釧路市動物園の持つ価値を魅力的に効率的に伝える事ができる整備順序を考慮し、「北海道ゾーン」を第一の整備対象としていきます。

ゾーン名	基本構想(20年)		整備方針
	基本計画(前期)	基本計画(後期)	
北海道ゾーン			当園の特徴的なゾーンであることから、他に優先して整備する
寒帯動物ゾーン			当面は部分的な改修で見せ方の工夫を行ないながら、移転改築が必要な整備は後期の段階で行なう
熱帯動物ゾーン			寒帯動物ゾーンの再整備にあわせながら移転改築になるため後半での整備となる
ふれあいゾーン			西門エリアの遊戯施設の撤去にあわせ空きスペースが出来次第、ふれあい動物広場等より充実したふれあいゾーン施設整備を行う
遊園地ゾーン			西門エリアの遊戯施設は、老朽化のため逐一撤去する。必要最低限の電動遊具のみ正門エリアに新規設置する
動物園付属施設 (タンチョウ関連施設)			阿寒国際ツルセンター、丹頂鶴自然公園、タンチョウ保護増殖センター3施設の機能分担による整備を行う

事業計画スケジュール

10. 動物園付属施設（タンチョウ関連施設）の整備計画

10.1. タンチョウ関連施設における基本計画の進め方

平成 17 年、釧路市、阿寒町、および音別町が合併し、新たな釧路市となりました。このため、釧路市は釧路市動物園の所管施設として、釧路市丹頂鶴自然公園（昭和 33 年開園）、タンチョウ保護増殖センター（昭和 56 年開設）、阿寒国際ツルセンター（平成 8 年開設）の三つのツル関連施設を抱えることになりました。これらの施設は設立当時のタンチョウが抱えている問題を解決することを目的に設立され、それぞれ特徴のある活動が展開されていますが、類似する事業もあります。

そこで、釧路市動物園は類似機能も有する 3 施設の合理的かつ効果的運用を進めるため、現在のタンチョウが置かれている現状を踏まえて、ツル関連施設についても基本計画を定めることにしました。

そのために、まず釧路市のタンチョウに対する取り組みについてのビジョンを、動物園として整理し、全体的な方向性を定めることにしました。

続いて、ツル施設の現状を解析した後、3 施設の機能（基本方針）を明確にし、それらの結果に基づいて、丹頂鶴自然公園と阿寒国際ツルセンターの施設整備計画の方針を策定することにしました。



タンチョウ保護増殖センター



釧路市丹頂鶴自然公園



阿寒国際ツルセンター

10.2. 釧路市におけるタンチョウに対する取り組み（ビジョン）

タンチョウといえば釧路を連想するほど、国内外の人々による釧路地方とタンチョウとのイメージの結びつきは強く、タンチョウの存在そのものが観光を通じて釧路地方に高い経済効果をもたらしています。しかしながら、釧路市民の多くはタンチョウについてあまり関心を持っておらず、また自分たちの先人たちが行ってきたタンチョウ保護活動とその経過やタンチョウの現状について、学校教育を通じてさえ詳しくは知らされていません。

自然環境の保全や野生動物の保護の第一歩は、行政、農家、市民らがコミュニケーションを通じて正確な情報を共有することです。したがって、釧路市には、飼育管理や野生集団の危機管理に関わる調査、あるいは給餌や監視活動などの実践活動のほか、市民や観光者に向けたコミュニケーションや情報発信、あるいは環境教育を通じた普及啓発を充実していくことが、今後一層求められています。また、この普及啓発事業により、市民の郷土に対する誇りが培われ、来訪者に対する釧路市の魅力が一層強く伝わっていくでしょう。

10.3. ツル施設の全体的方向性

釧路市には単一希少種では世界に類を見ないほどの情報がタンチョウ関連施設に集積されています。他方、飼育しているタンチョウや野生のタンチョウにおいて今何が起きているのか、といった情報がリアルタイムで市民に広く伝えられていません。

したがって、ツル関連施設には従来の 1) 調査研究施設としての機能の継承の他に、2) 情報の収集・集積・発信基地、および 3) 教育施設としての機能が求められます。

10.4. タンチョウ関連施設の現況解析

1) 施設

タンチョウ保護増殖センターは釧路市動物園に隣接する施設で、25.8ha の面積を有していますが、その大部分は公開されていません。ここでは、傷病で保護される個体や死体について動物病院を併用しながら治療とリハビリ、解剖を行い、また死体標本の保管を行っています。

釧路市丹頂鶴自然公園（9.8ha）はたんちょう釧路空港に隣接する施設で、タンチョウの保護増殖研究の場として位置づけられています。丹頂鶴自然公園は湿地環境に設置された施設であり、本来の生活空間に近い状態でタンチョウが飼育管理されています。また、管理棟には丹頂鶴自然公園の歴史などを紹介した展示室があります。

釧路市阿寒国際ツルセンター(7.2ha)はツル類の学習教育の場として位置づけられており、周辺には、「道の駅『阿寒丹頂の里』」、「あかんランド丹頂の里」、「北緯43度美術館」、農村公園といった施設が隣接しており、阿寒地区のレジャー・スポットになっています。ツルセンターにはツル類の飼育場のほか、博物展示室、ライブラリーコーナー、研究室等がある本館があります。また、人工給餌発祥の地として知られる阿寒給餌場に飛来する野生タンチョウを観察できる別館タンチョウ観察センター（昭和52年開館）やビオトープがあり、これまで研究教育施設として整備されてきました。



雛の検診



鶴公園での子育て風景



阿寒給餌場での給餌風景

2) 飼育展示施設等

タンチョウ保護増殖センターの飼育場には動物園来園者が観察できるように北海道ゾーンの園路に公開スペースが設けられています。ここは、開設以来改修されておらず、老朽化しています。また地下水の供給量が減少するなど、飼育環境の悪化も徐々に進行しています。

丹頂鶴自然公園は湿地環境に開設されているため、来園者は野生では観察することが難しいタンチョウの本来の暮らしぶりを間近に見ることができます。しかし、画一的な複数のケージが幅500mにわたって設置され、フェンス越しにタンチョウを観察する展示スタイルをとっており、自然豊かな施設環境特性を生かし切れていません。このため、来園者はタンチョウ、人、そして自然とを有機的に結び付けることができていません。また、昭和63年に改修されましたが、その後の湿地の乾燥化（森林化）、フェンスの凍上や老朽化が進んでいます。

阿寒国際ツルセンターでは、展示室展示物が老朽化し、かつ更新されておらず、また飼育展示数の少なさから、来館者に十分な満足度を与えることができていません。また、飼育施設でも設備の劣化が目立ち始めています。ここには、放棄農地が湿地環境（ビオトープ）へと造成されており、また冬季にねぐらとして利用する阿寒川も隣接しています。しかし、これらの環境が自然環境の学習の場として有効に活用されているとは言い難い状況です。



老化著しい増殖センターのケージ



鶴公園の園路



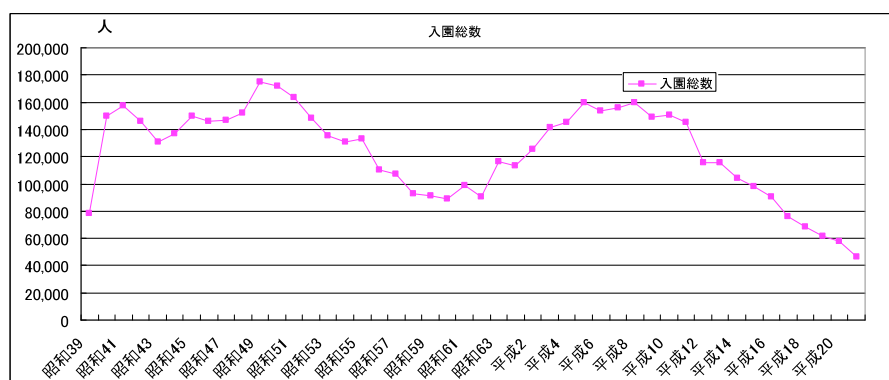
阿寒ツルセンターのビオトープ

1) 利用実態（丹頂鶴自然公園と阿寒国際ツルセンター）

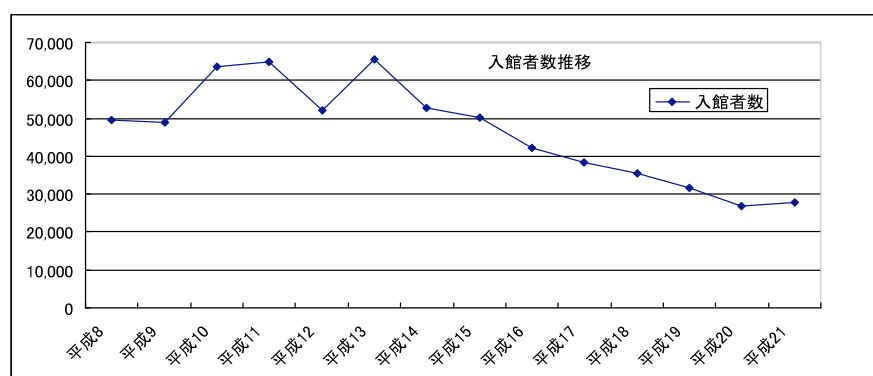
丹頂鶴自然公園の入園者は一般公開が始まった昭和 39 年以降、10 万人から 17 万人で推移していましたが、平成 12 年から減少が始まり、今も減少傾向の歯止めが利かず、平成 21 年度は 46,336 人まで減りました。

阿寒国際ツルセンターは平成 13 年度の 65,416 人のピーク後、減少が続き、特に冬季入館団体の減少著しい状況にあり、平成 21 年度の入館者は 27,811 人でした。

丹頂鶴自然公園も阿寒国際ツルセンターも、釧路市動物園の所管施設でありながら、教育施設としての利用に関するコンセプトが統一されておりません。



丹頂鶴自然公園の入園者数推移



阿寒国際ツルセンターの入館者数推移

2) 運営状況

丹頂鶴自然公園と阿寒国際ツルセンターは、共に動物園所管施設ですが、それぞれ別々に運営されています。動物園のツルに関する事業として統一して事業を展開するためには、システムの統一が必要です。

10.5. 各施設の機能（基本方針）

1) タンチョウ保護増殖センター（野生タンチョウ危機管理施設）

生息数の増加に伴って事故が増え、最近では毎年 30 羽ほどの傷病タンチョウや死体が収容されます。このような状況は今後も続くため、収容死体の解剖、死体標本の保存管理、および傷病個体の治療施設として機能を継続します。また、これらに関する情報について広く市民に向けて発信していきます。

2) 丹頂鶴自然公園（体験型展示施設・研究施設）

野生タンチョウが感染症等により著しく減少した場合に備えて、自然繁殖技術の向上と野生化技術の確立に向けた取り組みを行います（保護研究施設）。

また、嘴や翼が欠損して野生復帰できない個体については、繁殖用に活用し、また人と野生生物との共存について考える生きた教材として活用します。

さらに、四季を通じて自然状態のツルが観察できる環境特性を生かし、普及啓発のため自然体験型展示観察施設としても位置づけます。

この他、たんちょう釧路空港という道東の玄関口に近い交通の利便性を生かし、野生タンチョウの観察マナーや情報集積発信のための野生タンチョウ情報センターの機能を持たせます。

3) 阿寒国際ツルセンター（学習施設）

阿寒国際ツルセンターでは、既存の博物展示室やライブラリーコーナーなどの施設を有効活用し、ツル類の学習教育施設として機能をさらに充実させていきます。

また、ツル類保護の先駆的役割を担ってきた釧路のタンチョウ保護活動を国内外に紹介し、またアジアのツル類についての最新情報の集積と発信をするアジアのツル類情報センターとして機能を充実させていきます。

さらに、形態や生態の違いを通じて、タンチョウへの理解を深められるよう、アジアのツル類の生態展示を検討していきます。



学習会（こどもワークショップ）の風景

10.6. 各施設における整備計画の方針

1) タンチョウ保護増殖センター

野生タンチョウ検死・標本管理

■死体の死因究明、死体標本の保存管理に要する施設の充実を進めます。

傷病個体治療

■動物園内の動物病院や治療施設と連携して、施設や設備の充実を進めます。

2) 丹頂鶴自然公園

展示教育と研究との両立

■保護研究と教育普及の両立を図るため、飼育展示場の二極化を行います。

保護研究

■タンチョウの増殖技術向上と野生化技術確立のため、人の影響を極力排した非公開施設を整備します。

自然体験型展示

■本来のタンチョウの生活空間と暮らしを理解できる自然体験型飼育場の整備を目指します。

■整備に当たってはソフト面を先行し、実験的な整備とその結果をフィードバックしながら最終的な計画を策定します。

■自然体験型飼育場について正しく理解されるように、魅力的で適切な解説展示を整備します。

野生タンチョウ情報センター

■来園者が目撃した釧路管内でのタンチョウや他の野生生物情報を掲示できる情報交流空間を設けたり、タンチョウの観察マナー向上の場を提供します。

ソフト

■解説者とツルとのコラボレーション（解説者と来園者との対話）を通じてタンチョウの情報を発信する体制を整えます。

■タンチョウの生態、行動、抱えている課題を理解するための解説用教材を年齢、年代別に開発します。

3) 阿寒国際ツルセンター

ツル類の学習教育施設：

■脚の熱交換システムや飛翔の仕組みなど、生理学的あるいは学問的な興味を満足させる視点の展示物を中心に、見て、聞いて、触って、遊んで学ぶ「参加体験型展示物」へと再整備します。

■子供達が学習できる実験研究体験室を設置し、研究体験を通じて自然環境保全の意識が根付くように整備します。

■タンチョウを始めとするツル類の博物館として、主としてタンチョウに関する博物標本の集積と保管設備を充実します。

■道の駅や農村公園を有効活用して、旅行で休息に訪れた人々に向けた「学びの場」を整備します。

■ビオトープから阿寒川までの空間を自然教育園として、環境整備を進めます

アジアのツル類情報センター

■ツル類保護の先駆的役割を担ってきた釧路のタンチョウ保護活動の国内外への紹介と、アジアのツル類についての最新情報の発信について、インターネットを通じた情報配信のほか、旬な情報を提示できるコーナーを整備します。

■形態や生態の違いを通じて、タンチョウへの理解を深められるように、また来館者にアジアのツル類の現状を伝えるために、アジアのツル類の生態展示施設を検討します。

ソフト

■夏期、ビオトープの自然教育園として利用できる解説プログラムを開発します。

■年齢、年代別の教育ワークショップ プログラムの開発を行います。

10.7. 施設の運営戦略

1) 施設の名称

釧路市丹頂鶴自然公園と釧路市阿寒国際ツルセンターは、動物園所管施設であるにもかかわらず、市民からは独立した個別の施設として誤認される恐れがあります。また、施設機能の性格が連想できる施設名への改称も検討する必要があります。

改称例：

■釧路市丹頂鶴自然公園は、釧路市動物園 丹頂自然公園とする。

■釧路市阿寒国際ツルセンターは釧路市動物園 阿寒ツルセンターとする。

2) 計画的事業展開

効果的な施設運営のためには、施設機能に係るコンセプトに基づいて、それぞれの施設について5年あるいは10年の中長期計画を策定し、施設運営にあたる関係者は意思統一して、実現に向かう必要があります。

■基本計画（コンセプト）に基づいて、戦略的に、5年とか10年計画（目標）を策定します。

■展示施設、解説施設、あるいは見せ方など、5年あるいは10年スパンで計画的に見直し、リニューアルするとともに、市民へ周知を行います。

■観光客も市民のツルへの理解のために、3つの今の施設をうまく活用するソフト面を充実します。

3) 市民一体となった活動

ツル関連施設で求められている事業内容は多岐に渡っており、高度な専門知識も必要とされる分野もあります。このため、計画を実現するには指定管理者のほかに、民間団体参加型の運用も視野に入れる必要があります。また、施設をサポートしていただくボランティアの育成も図る必要があります。

■情報集積と発信を得意とする分野の団体、教育分野についてノウハウのある団体、市民活動の支援についてノウハウのある団体、観光者に対するサービスについてノウハウのある団体等が共同で事業を展開できるシステム（ソフト）作りを目指します。

■ボランティア(団体)が課題を見出し、自ら解決するような組織作りを目指します。

■学校における郷土教育として、タンチョウの保護の歴史が取り組まれるよう、調整を図ります。